

法華經に見られる Śraddhā ṁ Adhimukti

——見宝塔・勸持・安樂行・從地涌出・如来寿量品に関して——

望 月 海 淑

1

法華經における śraddhā と adhimukti の使用例を検へ来たっているのであるが、今回は前三回に引き続いて、見宝塔品から如来寿量品までを見て行くことにする。このように從來になく広範圍に亘って検討を加えるのは、従前と異ってこれらのところにはこの両語の使用例が少ないということを意味している。

2

見宝塔品（正・七宝塔品、梵 Stūpa saṁdarsana parivarta）は釈尊が法華經を説法している耆闍崛山のその場面に、大地から七宝で莊飾された宝塔が涌出し、その宝塔の住者である多宝如来から釈尊の説法（1）法華經の正しさが証明された（1）ということを物語っている。正しいもの、釈尊の出世の本懐が多宝如来という法身仏によって証明されるものであるならば、正しい經典に対する行いのあり方、行動についての覚悟が必要となつて来る。すでに行いのあり方としては法師品において、五種法師として説示されたところ（2）であるから、見宝塔品では覚悟が求められるところと

なる。そこで釈尊は

誰能於⁽³⁾此娑婆国土⁽³⁾広説⁽³⁾妙法華經⁽³⁾。今正是時。如來不⁽³⁾レ久當⁽³⁾入⁽³⁾涅槃⁽³⁾。仏欲⁽³⁾以⁽³⁾此妙法華經⁽³⁾付⁽³⁾屬⁽³⁾有⁽³⁾在⁽³⁾。

と語つて、仏滅後においての法華經の弘通者を求めることを表明している。そして得難い法華經であるからこそ、仏滅後に法華經を説くことの困難さ、六難九易が語り出されている。

於⁽⁴⁾我滅後⁽⁴⁾ 聽⁽⁴⁾受此經⁽⁴⁾ 問⁽⁴⁾其義趣⁽⁴⁾ 是則為⁽⁴⁾難⁽⁴⁾

この一句はその六難九易の中のものであるが、これに対する正法華經は

若持⁽⁵⁾此經典⁽⁵⁾ 信喜而愛樂 數々謔稱者 爾乃為⁽⁵⁾殊異⁽⁵⁾。

とあつて、妙法華經が聽受此經と訳したものを、正法華經は若持此經典と訳し、更に信喜而愛樂の訳をつけ加えて説明している。この辺のところを梵文法華經に見ると、

tasyēdān duṣkarataraṇ idān sūtraṇ ca dharaṇet |

śradddhēd ahimucyēd vā drāṣēd vā pi punaḥ punaḥ || ⁽⁶⁾

(この經典を受持し、信じ、信解し、再び三度び語るならば、それは困難である)

となつており、受持することの内容を明白に示している。妙法華經が何故に聽受の二文字で省略したのかは解らないが、梵文法華經の場合、興味を引くのは śradddhā と ahimukti の語が並べて語られていることである。そしてこのようなあり方は、安樂行品や從地涌出品や分別功德品などにも見られるのであるが、もしもこの二語が全く同じ意味を示す語であるならば、このように śradddhā 一 ahimukti として続けて語られることは意味を強めること以外にはないであろう。しかし、続けて二語が語られるというためには、この二語がもっている意味合いに、それぞれちがった

ものがなければならぬであろうと思われる。正法華經が信喜と愛樂との二語に訳出したのは、その辺の事情をくみとつての上であつたらう。しかし見宝塔品の中では、右の偈以外にこの二語についての説示が見られないので、ここではそれを究明する手がかりはない、といわなければならない。

尚、見宝塔品では、空中 *antariksa* に昇つた多宝塔を見ることによつて四衆等が体得した心の状態について、皆得(7)三法喜(7)怪未會有(7)。從(7)座而起恭敬合掌(7)

とのべているが、この得法喜怪未會に關して梵文法華經は

sanjāta harṣāḥ pūti prāmodya prasāda prāptiḥ(8)

(歡喜を生じ、喜びと喜悅と淨心を得た)

となして、信についての語の一つとされる *prasāda* (淨心) の語を使用している。尚、これに対する正法華經の訳語は歡喜踊躍(9)であるから、妙法華經ともども *prasāda* にどう対処したのかは解らない。

3

勸持品(正・勸説品、梵・*Utsāha parivarta*)は藥王菩薩と大樂説菩薩と二万の眷屬が仏滅後に法華經を受持し説くことを誓ひ、授記をうけた五百の阿羅漢や八千の学無学の比丘らが娑婆世界で法華經を説くことが困難なので、他の世界で説くことを誓っていることを示し、更に、摩訶波闍波提 *Mahāprajāpati* と耶輸陀羅 *Yasodhara* とその眷屬らに授記を与えることが示される。彼女らも他方の国土で法華經を説くことを誓っている。しかして勸持品は、八十万億那由佗の菩薩を見られたので彼等は、積尊にむかつて、法華經を弘めようと誓つて二十行の偈を語るといふ説

示をなしている。

この勸持品の冒頭における棄王菩薩らの誓言の中に

後惡世衆生。善根転少。多増上慢^一。食利供養^二。増三不善根^一。遠^三離解脫^一。⁽¹⁰⁾

とある。これは仏滅後の惡世の人々のことについて語ったものだが、これに対する正法華經の訳文は

仮使有^レ人。儻^レ自用。性不修調。薄德無福。心懷^二自大^一。著^三供養利^一不^レ備^三善本^一。離^三於解脫^一。⁽¹¹⁾

であるから、ともに解脫の字が見える。梵文法華經は

sattvas tasmim kâle bhaviṣyanti paritta kuśala mūla adhimānikā labhasatkāla samṁsṛitā akuśala
mūla pratīpanā durdamā adhimukti virahitā anadhimukti bahulāḥ⁽¹²⁾

(この時、衆生らは欺満的で、善根に限りがあり、高慢で、利益と名譽にとらわれ、不善根で、自制心なく、信解の志向なく、信解ならざるものが強い)

とあるから、漢訳両經が解脫を離れると訳したものは、adhimukti virahitā anadhimukti bahulāḥ に対してのものであることを示している。即ち(12)では adhimukti が解脫と同義にとり扱われたことを示すのであろう。

そして勸持品の二十行の偈の末尾には次のように示される。

我於^三世尊前 諸来十方仏^一 発^三如^レ是誓言^一 仏自知^三我心^一。⁽¹³⁾

これに対する正法華經は

一切世光曜 十方悉来会 我当^レ言^三至誠^一 悉見^三我心不^レ虚^一。⁽¹⁴⁾

とあるから、妙法華經は誓言をなした我が心を知って欲しいとし、正法華經は我の至誠の言葉の心は虚しくはないと

いう表現をし、ともに類似した内容であるが、梵文法華経は、

sarve ca loka pradyotā āgatā ye diśo daśa |

satyān vācān prabhāsāmo adhimuktīm vijānāsi || (15)

(十方から集まった一切世間の光明よ、我々は真実の言葉を語る。あなたは信解を知っておられる。)

とあり、我々は真実の言葉を語る、あなたは adhimukti を知っているというから、漢訳両経によって心、心不慮と訳されたものは adhimukti に対する訳であることを示している。漢訳両経に訳されたこの心、或は心不慮は、法華経を弘経する者としての心のあり方を述べるものであるが、この立場をふまえる時、adhimukti を知っているという時の adhimukti は弘経者の心の状態・あり方を表現しようとしたものであろう。それは法華経を信じようという出発点のことに主意があるのではなくて、信じ得たもののもつ心のあり方、心の状態を意味するものと思われる。

すなわち、勸持品で二度示される adhimukti の語に関して妙、正両法華経ともに一度を解脱と訳し、一度を妙法華経は我が心を知ると訳し、正法華経は心不慮を見ると訳している。この場合の見るは我々の心の様を見て知りつくしているという意味であろうから、その両者は同様の見解に立ったものと思われる。したがってここでは、adhimukti は単に信ずるということではなくて、傾り得たものが立っている心を理解する、知り尽くしているといった意味に把握されていると思われる。

松澤誠廉博士らによる法華経の和訳は、ここのところを、あなたは(私どもの)燃ゆる思いをごぞんじです、と訳出しているが、adhimukti を燃ゆる思いと訳出したのも、それが śradhā がもっているような信じますという意味あいとはちがうものであると考えられたからであらう、と思われる。

漢訳兩經を見る限り、勸持品の中では右の二箇所の外に、信樂の語と敬信の語との訳語を見ることが出来る。前の信樂の語は、摩訶波闍波提と耶輸陀羅とその眷屬とが敬尊に語ったものであるが、正法華經には

唯然大聖。我等信樂是仏法訓⁽¹⁷⁾。堪任誦説。又及余人他方世界⁽¹⁸⁾。

とある。しかし、これに対する妙法華經は

世尊。我等亦能於他方国土⁽¹⁸⁾。広宣此經⁽¹⁹⁾。

となっており、梵文法華經は

vayam api bhagavan samutsahamaha imam dharmā parivāyam samprakāśayitum pascīme kāle paścīme samaye 'pi tv anyāsu loka dhātusv iti⁽²⁰⁾

(世尊よ、後の時代、後の時に我々は他の世界にいてもこの法門を説くことに努めます)

であり、妙法華經と同一のことを述べているのにすぎない。この法門の説示に努めるためには、その經典に対する真心がこめられなければならないから、正法華經は是の仏法の訓を信樂しと意訳を加えたのであらうと思われる。

又、二十行の偈と呼ばれる品末の偈の中の第十四偈にあたる妙法華經の訳文は、

悪鬼入⁽²¹⁾其身⁽²²⁾ 罵⁽²³⁾毀⁽²⁴⁾辱我⁽²⁵⁾ 我等敬⁽²⁶⁾信仏⁽²⁷⁾ 当⁽²⁸⁾著⁽²⁹⁾忍辱⁽³⁰⁾鎧⁽³¹⁾

とあり、仏を敬信すると語られている。これに対する正法華經は

悉屬⁽³²⁾我⁽³³⁾等⁽³⁴⁾ 諸比丘如⁽³⁵⁾レ鬼 在世行⁽³⁶⁾恭敬⁽³⁷⁾ 皆令⁽³⁸⁾忍⁽³⁹⁾苦患⁽⁴⁰⁾

と、恭敬を行ずとなしているが、梵文法華經は

gautraveṇḍha lokēndre utsahāma suduṣkaram |

ksāntiya kaksyañ bandhivā sūtran etan prakāṣaye ॥⁽²²⁾

(この世の王における尊敬をもって、極めてなし難いものを忍び、忍耐の鎧をつけて、この經典を説こう)とあり、そこには敬信・恭敬にあたる言葉は見られない。忍辱の鎧をつけてこの經典を説示しようというためには、先づその經典に対する信がなければならぬところから、漢訳両經におけるこれらの訳語は補なわれたのではなからうか。

4

安業行品(正・安行品、梵・Sukha vihāra parivarta)は勸持品のあとをうけて、釈尊の滅後に法華經を説示するための心得を述べたものである。それは身・口・意・誓願の四安業行という型で展開されるが、その六箇所において「信」に関する記述が見られる。四安業行の第三番目の意安業行を述べたところに、次のような言葉がある。

聽已能持。持已能誦。誦已能説。説已能書。若使_下人書。供_三養經卷_一恭敬尊重讚歎_上。⁽²³⁾

これは意安業行を成就した人には、同学の者があらわれ、又法華經を聞く大衆もあらわれて、聞いたものを持ち誦し……するであろうという下りに関するものであるが、これに対する正法華經は

若講若聞信_三業斯典_一。誦_三持書_三写藏之竹帛_一。⁽²⁴⁾

とあって、妙法華經に見られなかった信業の語をのせている。一方、梵文法華經は

ye 'syēnañ dhārṇa par'yāyam śroṣyanti śradhāsyanti patthyisyanti dhārayisyanti paryavāpsyanti
likhisyanti likhāpayisyanti pustaka gatam ca kṛtvā……⁽²⁵⁾

(この法門を聞き、信じ、頼り、受持し、理解し、書写し、人をして書写させ、書物となし、恭敬し……)

であるから、正法華經の信樂の訳にあたる *śraddhā* の語をあらわしている。

法華經を受持するためには、その前に信ずるということがなければならぬのは当然のことであるから、*śraddhā* にふれられるのも当然のことだといえるが、逆に信は当然あるべき基本であるから妙法華經はこれを持つ一字に要約したのであらうと思われる。

そして、誓願安樂行を述べるところでは、智恵劣る人々に法華經を説こうとする時には、神通力をもってこの法の中に入らせんと誓願しなければならぬと語っているが、その言葉の中には、

如来方便隨_レ宣説_レ法。不_レ聞不_レ知不_レ覺不_レ問不_レ信不_レ解。⁽²⁶⁾

として不信と不解の語が示されている。正法華經は

行_三大乘者善權方便演_三眞諦誼。若聽聞者。不_レ知不_レ了不_レ説不_レ信不_レ省不_レ綜。⁽²⁷⁾

とあつて不信と不省の語が示されており、梵文法華經は

ye tathāgatasyōpāya kausalyam saindhā bhāṣitaṁ na śrīvanti na jānanti na budhyante na pṛcchanti
na śradadhanti nādhimucyante⁽²⁸⁾

(彼らは如来の善巧方便の深い意味で語られたものを聞かず、知らず、覺らず、問わず、信せず、信解しない。)とつて、*śraddhā* と *adhimukti* の二語を続けて語っている。

即ち、妙法華經の不信は *na śraddhā* の訳であり不解は *na dhimukti* の訳であり、それを正法華經は不信と不省とに訳出したことが解るが、こゝでは両者ともに *śraddhā* と *adhimukti* とに差を与えて理解していたことを示し

ている。

尚、妙法華經は右の文に続いて更に、

其人雖^五不^レ問^三不^レ信^三不^レ解^四是^經一。⁽²⁹⁾

とくり返した文の中で不信を語っているが、正法華經はこれを一続きのものとして扱っているのでくり返しが無いので、これに該当するものはなく、梵文法華經は、

rdhni balen' averjayisyami patityāpāyisyāmy avatārayisyami paripācayisyāmi ⁽³⁰⁾

(神通力によって、廻心させ、*patitya*させ、理解させ、成熟させるであらう。)

であって、そこには *śraddha* の語は見られぬ。ここでの妙法華經は *patitya* を信と訳したものであった。⁽³¹⁾

そして、誓願安樂行に住して法華經を説く者は過失がないだろうと述べられ、彼は比丘・比丘尼や諸天らに守護せられるからだという下りで、妙法華經は

虚空諸天為^レ聽^レ法故亦常隨侍⁽³²⁾

と語り、正法華經も

虚空神明無數天子聽^三所說^經一⁽³³⁾

と示すが、梵文法華經は

antarikṣāvacarās cāśya devatāḥ śraddhāḥ pśīhato 'nubaddhā bhaviṣyanti dharma śravaṇāya ⁽³⁴⁾

(空中を行く神々は、信を抱き、法を聞くためにあとに従うであらう。)

となして、漢訳兩經になら *śraddha* を語り、*śraddha* がある故に法華經を聴こうとして随侍していることを示して

いる。文章の型としてはこの方が自然であるように思われる。

安樂行品では更に、譬中明珠の喩の中で二度、信に関する記述が見られる。即ちそれは以下此難信之珠久在譬中⁽³⁵⁾。不_レ妄与_レ人。而今与_レ之⁽³⁵⁾

であるが、この箇所における正法華経は意識した如くで該当する言葉が見あたらない。しかし、梵文法華経には、
sarva lokāśradhēyaṃ viśmaya bhūtaṃ⁽³⁶⁾

(一切世界はそれを信ぜず、驚きを生じた)

とあって、妙法華経では難信が珠の形容詞のように見られるのに対して、転輪聖王が譬中の珠を人に与えることが信じ難いことを述べている。

そして続いて法華経が一切衆生を救う教えであるが、それは、

一切世間多_レ怨難_レ信。先所_レ未_レ説而今説_レ之⁽³⁷⁾

となしており、正法華経は

普諸世界古今以来。無_レ有_レ信_ニ此正法華経_一未_ニ曾暢_レ説⁽³⁸⁾

となし、梵文法華経は

sarva lokāśradhēyaṃ abhāṣita purvaṃ anirdīpa purvaṃ dharma paryāyaṃ bhāṣate sma⁽³⁹⁾

(一切世界が信ぜず、未だ曾って語られたことも示されたこともないこの法門を説かれた)となしているから、ここでは三経とも同じで信じ難いのは法華経だということを示している。

このように安樂行品においては、一箇所のみにおいて *adhimukti* が語られており、他の五箇所では *śraddha* が語

られ、一箇所は *patiya* が語られている。指摘して来たように *saddha* を妙法華経は三度に亘って信と訳し、二度は意訳をしており、正法華経は一度は信と訳し、一度は信樂と訳し、二度は意訳をし、*adhimukti* に関しては妙法華経は不解と訳し、正法華経は不省と訳している。すなわち、ここでは妙・正法華経はともに *saddha* を信するもの、*adhimukti* を理解をとまなうものとして抱擁していると思われる。

この両語のちがいを端的に示すものが、*saddha* と *adhimukti* とが続けて語られた箇所であろう。これは両語を相違する質をもつものと暗示をするものと思われる。しかし、次の従地涌出品や分別功德品の漢訳両経の場合は、この間に差別を認めていたかどうかは疑わしいと思われる。

〔註〕

(1) 多宝如来は宝塔の中から大音声を放ち、「善哉善哉……釈迦牟尼世尊、如所說者、皆是真實。」(大正九・32中)下、102下、K240。)と語り、多宝塔の扉を開いた釈尊が塔の中で多宝如来と並んで坐った。(大正九・33下、104上、K249、250)と示されている。

(2) 便宜上、五種法師と表現したが、妙法華経以外は五種の型に整理されてはいない。樓神四一号、P73以降、拙著「五種法師についての一試論」参照

(3) 大正九・33下、104上、K250

(4) 大正九・34中

(5) // 105上

(6) K 255

(7) 大正九・32下

(8) K 240

(9) 大正九・102下

(10) 大正九・36上

(11) // 106中

(39)	K	290
(38)	〃	109下
(37)	大正九・39上	
(36)	K	290
(35)	大正九・39上	
(34)	K	288
(33)	〃	109中
(32)	大正九・38下	
(31)	從地涌出品の中で、この言葉は <i>śradhā. adhimukti</i> と並んで使用されている。K 312	
(30)	K	288
(29)	大正九・38下	
(28)	K	288
(27)	〃	109中
(26)	大正九・38下	
(25)	K	286
(24)	〃	109上
(23)	大正九・38中	
(22)	K	273
(21)	〃	107上
(20)	大正九・36下	
(19)	K	270
(18)	〃	36中
(17)	大正九・106下	
(16)	中央公論社・法華經II 61	
(15)	K	274
(14)	〃	107中
(13)	大正九・37上	
(12)	K	267

從地涌出品（正・菩薩從地涌出品。梵・Bodhisattva pṛthivi vivara samudgama parivarta）は、他方の国土から来た八万恒河沙の数を越える菩薩らが、我々も釈尊の滅後において法華經を弘めようと申し出るが、釈尊はこれを制止されて、わが娑婆世界には六万恒河沙の菩薩らがいる、この者らが法華經を説くであろうと述べる。その時、大地から沢山な上行菩薩等の菩薩らが涌出し釈尊に対して久闊を述べる。これを見て人々は驚き、この地涌の菩薩らは何処から何の因縁をもつて来たのか、と弥勒菩薩が代表して釈尊に質問をする、という型をとって説示が展開されている。

その從地涌出品は説示の前半において、二度 *adhimukti* に関する説示を見せ、後半において一度 *adhimukti* 七箇所で *śraddhā* に関する説示を見せている。

最初の *adhimukti* に関する説示は、涌出した菩薩らが釈尊に挨拶し、それに答えた釈尊の言葉の中に見られる。即ち、釈尊は今まで教化して来た衆生らは世々よりこのかた諸仏を供養し、善根を植えているので化度し易いと述べて次のように語っている。

始見^ニ我身^ニ聞^ニ我所説^ニ。即皆信受入^ニ如来慧^ニ。⁽¹⁾

これに対する正法華經は

是諸声聞信樂。吾教入^ニ于仏慧^ニ。⁽²⁾

であり、梵文法華經は

darśanaṁ eva hi kula putrāḥ śravaṇac ca manādhimucyante buddha jñānam avataraṁty avagāhante (3)

(実に善男子よ、私を見るだけ、聞くだけで信解し、ブツダの智慧を理解し、入っている)

と示している。即ち、信受・信樂と阿漢訳經典によって訳出されたものは、adhimucyante の語であるといえる。この言葉は adhimukti の基本となる動詞 adhi√muc の三人称・複数・能動態に外ならないから、adhimukti と同様
に判断しても差しつかえはなからう。信は本来、行いをもなうべきであるが、⁽⁴⁾この adhimuc にはむしろ理解
するという意味あいの方が強いようである。これは adhimukti が śradha の意味する信とはちがっていることを暗
示していると思われる。

このような積尊の言葉を聞いた菩薩らは偈を語るが、その中には

能問諸仏 甚深智慧⁽⁵⁾ 聞已信行 我等隨喜

とある。この箇所の正法華經と梵文法華經はそれぞれ

欲得⁽⁶⁾聞大聖 教命詢深要 聽之歡喜信 乃入法供養

ye cēdaṁ jñāna gambhiraṁ śrīṇvanti tava nāyaka —

śrūtṅvā ca adhimucyante uttaraṁti ca nāyaka ॥

(指導者よ、あなたのこの深遠な智慧を聞き、聞いて信解し、到達する、指導者よ)

であり、信行・信と訳されたものは adhimucyante であることを知りうる。この箇所における adhimuc の意図するものは、この前の長行におけるものと同様であらう。

そして、この二箇所における adhimuc の使用例はともに仏滅後において法華經を説くことを申し出でたのに積尊

よって制止された八万恒河沙の菩薩らについて語られた箇所において見られるものであった。これが従地涌出品の中での地涌の菩薩らについての説示に関して相違があるかどうかは興味あるところとも思われる。

更にこの品は、弥勒菩薩らが地涌の菩薩らについて質問をなし、釈尊がこれに答え、地涌の菩薩は私が教化したものだと言及するが、その時の偈の末尾において、

我今説実語一汝等一心信⁽⁸⁾

と宣言をしている。これに対する正法華経は

今仏所説 至誠無漏 聞⁽⁹⁾二仏歎詠一 皆当⁽⁹⁾信⁽⁹⁾之

であり、梵文法華経は

anāsravā bhūta iyañ mi vacā śrūptiva sarve mama śradadhadhvam⁽¹⁰⁾

(私の汚れなき真実の言葉を聞いて、すべて私を信ぜよ)

であるから、śradhaが信と訳されたことは明白であり、地涌の菩薩の存在は釈尊の言葉を信ずる以外に道がないことを示しているであろう。

更に弥勒菩薩は未曾有なりと怪んで、釈尊は釈迦族の太子として出生し、仏陀伽耶で覚りを開いてから、四十余年を過ぎたばかりであるのに、地涌の菩薩らが久遠よりこのかた菩薩の道を行じ梵行を修しているというのは、二十五才の青年が百才の人を指して、これはわが子だというようなもので信じられないと述べているが、その所を妙法華経は、

是事難⁽¹¹⁾信。

と述べ、正法華経は

世俗之人所不信者。而今得信⁽¹²⁾

と述べ、梵文法華経は

tasya ca puruṣasya bhagavanis tad vacam aśradddheyaṁ bhava lokasya duḥśradddheyaṁ⁽¹³⁾

(世尊よ、この人の言葉は世間の者にとって信じられず、信じがたいでしょう)

と述べている。即ち、aśradddheyaṁ と duḥśradddheyaṁ とを妙法華経はまとめて難信と訳出しているが、正法華経の而今得信の訳出はどのような理由によるものかは理解しがたい、といわなければならぬ。

そして、弥勒菩薩は更に不信を語るが、その箇所は次のようである。先ず妙法華経は

我等雖復信⁽¹⁴⁾仏随⁽¹⁴⁾宜所⁽¹⁴⁾説。仏所⁽¹⁴⁾出言未⁽¹⁴⁾曾⁽¹⁴⁾虚⁽¹⁴⁾妄⁽¹⁴⁾。……諸新発智菩薩。於⁽¹⁴⁾仏滅後。若聞⁽¹⁴⁾是語或不信受⁽¹⁴⁾。

と述べ、正法華経は

今我以⁽¹⁵⁾受⁽¹⁵⁾信⁽¹⁵⁾誓誠諦⁽¹⁵⁾。……新学菩薩……如来滅後聞⁽¹⁵⁾是經典⁽¹⁵⁾。終不信也⁽¹⁵⁾

と述べ、梵文法華経は

kiṁ cāpi vayan bhagavanis tathāgatasya vacanam śradddhayā gamiṣyāmaḥ | ... nava yāna saṁprasthitāḥ khalu punar bhagavan bodhisattvā mahāsattvā ... parinirvṛte tathāgata imāṁ dharmā paryāyaṁ śrutvā na patnīṣyanti na śradddhāsyanti nādhimokṣyanti⁽⁹⁾

(世尊よ、我々は如来の言葉を信ぜられるでしようか。…世尊よ、新発智の菩薩大士らは、……如来が完全な涅槃に入った後に、この法門を聞いても、patnīya せず、信せず、信解しないでしよう。)

と述べている。即ち、如来の言葉が信じられないという時は *śraddha*⁽¹⁷⁾ であり、新發智の菩薩らが信受しないだろうという時は、*patiya* と *śraddha* と *adhimuc* との三つの言葉によって語られていることを、梵文法華経は示している。漢訳兩経がこの三語をまとめて不信受、不信の一語をもって訳出したのは、それぞれが類似した意味合いを持つものと判断したためかもしれない。たしかに煩雜と思われるまでにくり返し言葉を連ねて強調するような習慣が經典にはあるけれども、しかしこのように三語を並列することはそれが不信を強調するためであったとしても、三語の意味合いを全同とするわけにはいかないであろう。

従地涌出品はその品末において、弥勒菩薩偈を載せているが、その中の四十七偈に次のように示されるところがある。

是事難思議 云何而可信⁽¹⁸⁾

これに対する正法華経は

諸菩薩衆 如是色像 為如云何 誰當信此⁽¹⁹⁾

であり、梵文法華経は

kathan imān abhutam idṣaṅ te taṁ śraddadhīsyanti imi bodhisattvaḥ⁽²⁰⁾

(どうしてこの菩薩らはこのような不思議なことを信じるだろうか)

であり、三経とも同一内容で、信と語られるものは *śraddha* の語であることを示している。そして更に、四十九偈では

父少而子老 拳^レ世所^レ不^レ信⁽²¹⁾

とあり、正・梵兩法華經はそれぞれ、

是我等父 而為最勝 一切世間 無有信者 我等無失 (22)

duhśraddadhañ tad bhavi loka nātha daharasya putrā imi eva rūpāḥ (23)

(世間の指導者よ、このようなものが若者の息子とは信じ難い)

であり、ここでも三經ともに同様のことを示して、信じられないというのは duhśraddha の訳であることも明白である。

そして、品末尾のところで妙法華經は、

我等從仏聞 於此事無疑 願仏為未來 演說令開解 若有於此經 生疑不信者 即當墮惡道 (24)

と述べているが、正法華經は

於此仏道 而何所人 當信此言 若於導師 滅度之後 吾等於此 而無狐疑 仏前目覩 則聞菩薩

於是之処 初學罔然 將無菩薩 歸於惡道 (25)

と述べて、妙法華經の不信を當信と訳し、文章配列上に微妙なニュアンスのちがいを見せている。そこで梵文法華經を見ると、そこでは

kathan nu śraddheyam idañ bhaveyā parinirvṛte loka vināyakasmin |

vicikitsa asmāka na kacīd asi sṛnamathā saṁmukha loka nātha ||

vicikitsa kṛtvāna imasmi sthāne gaocheyu mā durgati bodhisattvāḥ | (26)

(世間の指導者よ、面前で聞いたので、我々には何の疑惑もないが、世間の指導者における完全な涅槃の後には、

どうして *śraddhā* せられましようか。菩薩らはこれについて疑惑をなして悪道におちてはならない)

となされている。即ち、妙法華経の不信の訳語は *nu śraddhā* に対するものであると思われるが、*śraddhā* されな
いからといってそのまま疑を生じて悪道におちてはならないというならば、それは *śraddhā* せよということの逆
説であろう。正法華経が当信と積極的に訳したのは、その辺をふまえてのことであろうと思われる。そこで、ここで
いわんとしていることは、釈尊の言葉へのそのままの *śraddhā*こそは悪道におちることをまぬがれる道だ、という
ことになるであろう。

即ち従地涌出品における七箇所の *śraddhā* の訳語例は妙法華経の信受の一度を除き、漢訳兩経ともにすべて信と
訳出しており、*adhimukti* に関しては漢訳兩法華経は一度づつ信受・信樂と訳し、一度は信と訳し、*śraddhā* などと
ともに語られた一度ではその訳例を見ることが出来ないということになるが、ここで注意すべきことは、漢訳兩法華
経において *śraddhā* と *adhimukti* との二語の差異が明白ではないということ、兩経ともに *adhimukti* を *śra-*
dhā と似た意に理解したのではないかと思われる点である。

しかし、梵文法華経の使用例に關してのみ見ると、品の前半においては *adhimukti* が語られ、後半においては
śraddhā が語られていることは、この兩者の間に差異が認められるように思われる。即ち、この品の前半は六万恒河
沙の衆生らに關する物語を展開しているが、そこでは *adhimukti* であり、地涌の菩薩が涌出してから後、弥勒菩薩
が地涌の菩薩の何たるかを質問するという、地涌の菩薩の本質論に關する物語の展開の中では *śraddhā* が使用され
ている。地涌の菩薩に關しては昔より未だ見ず聞かざるところであった、⁽²⁷⁾ というので、それは、地涌の菩薩の存在に
關して、或は釈尊の教化の力に關しては、人間としての理解や人間が人間として到達しうる境地をこえたものである

から、ここでは *śraddhā* のみが地涌の菩薩に関して知りうる道だと示そうとしているのではなからうかと思われる。

尚、妙法華経によると、

汝今出_レ信力_一 住_ニ於忍善中_一 (28)

と、信の文字を見ることが出来るが、この文に該当する正・梵法華経はそれぞれ、

皆當_テ強意 普存_ニ堅固_一 各建_ニ立志_一 一心平等_上 (29)

dhṛtimānta bhūtvā smṛtimānta sarve samahitāḥ sarvi śchita bhavadhvaṃ | (30)

(堅固を保ち、瞑想をなし、すべて禅定に住しておれ)

であって、妙法華経の信力の語は意識であるとしか考えられない。

[註]

(1) 大正九・40中

(2) // 111上

(3) K 301~2

(4) 石上善心「仏典に現われた *Bhakti* 信の用例」(印度学仏教学研究VOL812)には、*śraddhā* は師と仰ぐ人の教えを聞き、その人の教え、行動、その人自身に信頼することで、その規範を自分の行動と結びつけ、それがそのまま実践徳目とされるようになる、とある。そして、*adhimukti* については、心の自由な、即ち完全な状態をなす、とある。

(5) 大正九・40中

(6) // 111上

(7) K 302

(8) 大正九・41中

(9) // 112中

(10) K 310

(11) 大正九・41下

(12)	〃	1	1	2	下
(13)	K	3	1	1	
(14)	大正九	4	1	下	
(15)	〃	1	1	2	下
(16)	K	3	1	2	
(17)	patiya	について、	Ederton	はこの語が、	しばしば sradha と同じように使われることを指摘している。
(18)	大正九	4	2	上	
(19)	〃	1	1	2	下
(20)	K	3	1	3	
(21)	大正九	4	2	上	
(22)	〃	1	1	3	上
(23)	K	3	1	3	
(24)	大正九	4	2	上	
(25)	〃	1	1	3	上
(26)	K	3	1	4	
(27)	大正九	4	0	中、	1 1 1 上、
(28)	大正九	4	1	上	K 3 0 2
(29)	同	3	0	8	
(30)	K	3	0	8	

6

如来寿量品(正・如来现寿品、梵・Tathagatāyus pramāna parivarta)は、從地涌出品における弥勒菩薩の質問に答えるという型をとっているが、同時にこの品の主張は法華経の眼目であるといわれている。⁽¹⁾その骨子は伽耶始成の仏身觀を破して、仏の寿命の無限なることをあらわす久遠実成の仏身觀の説示を展開することにある。

即ち、五百塵点劫を説いて、伽耶成道の歴史的事実を破し、燃灯仏 Dipaṅkara として出現して見せたことも、涅槃

槃を示して見せたことも、すべて衆生を導き仏道に入らせるための方便に外ならなかったとして、積尊は久遠の生命の持ち主であるとの説示を展開している。

その如来寿量品は冒頭において次のように示している。

諸善男子。汝等当信解如来誠諦之語⁽²⁾

これに対する正法華経は

諸族姓子。悉当信弘誠諦至教。勿得⁽³⁾猶子⁽⁴⁾

であり、梵文法華経は

avakalpayadhvam me kulaputrā abhistraddadhadvan tathāgatasya dhutām vācam vyāharatah⁽⁴⁾

(善男子よ、如来の真実の言葉を信ずべし)

であるから、*śradha* を妙法華経は信解と訳し、正法華経は信と訳していることが解る。この言葉は三度くり返して語られているので、妙法華経も三度くり返して訳出をしているが、正法華経のみ、三孝^{三声詔}として三度くり返す訳を省略しているが、煩雑をさけるためであったのだろうと思われる。そして、積尊のこの勧めに対して弥勒菩薩をはじめとする人々は、これを説きたまえと三請をするが、その三請の中で、

我等当信受⁽⁵⁾仏語⁽⁶⁾

と語っている。この文に対する正法華経は

我等悉信如来所詔⁽⁶⁾

であり、梵文法華経は

vayam tathagatasya bhāṣitam abhīradhāsyāmah (7)

(我々は如来の語られたものを信するではありません。)

となっている。この言葉も梵文法華経では三度くり返して示されているが、妙法華経は右の我等当信受仏語の次に、如くは三百已。復言唯願説之。我等当信受仏語。と示して、三度くり返されたことを語って実は再言したにとどまっている。正法華経は我等悉信如来所詔。菩薩白仏而亦至三と、三度くり返したことを示すのにとどめられている。このくり返しは全く同じ言葉であるから、煩雑になることをさけようとしたためであろう。

しかし、品の冒頭において釈尊と菩薩らによって、このように三度びも同じ言葉が語られ、その中で śraddhā がそれぞれ口にされ、しかもそれが久遠実成を説示する発端となっていることからして、それは方便品における釈尊と舍利弗との三止三請に関して語られたところと軌を一にするものであり、そこには深い意味がこめられていると思われる。

如来寿量品は更には偈の中において śraddhā に関する説示を展開している。即ち、世間の父である釈尊は久遠の生命を持つものであるが、狂子を治する良医のように、顛倒せる凡夫 viparīta mūḍhā なるを知って涅槃 nirvāṇa して見せたのだとしているが、それは

以常見我故 而生橋恣心 放逸著五欲 墮於惡道 (8)

ためであったとしている。この妙法華経では śraddhā に言及しているとは思われないが、正法華経の中には、

何故慙慙 欲得現已 人常闇弊 使意信染 以放逸故 墜墮三处 (9)

とあり、梵文法華経は

kin karamān mahyam abhikṣya darśanaṭ viśraddha bhonti abuddhā ajānakāḥ |
viśvasta karmesu pramatta bhonti pramadahetoḥ prapatanti durgatim || (10)

(何故か。私が常に(姿を)見せると理性なく無知なるものは信じなくなり、愛欲にあえぎ、放逸な狂気のために悪道におさる)

となして、常に釈尊の姿が目の前にあれば、śraddhaしなくなってしまう、それによってやがては悪道に入ること示している。この śraddha を正法華経は信樂と訳出しているのであるが、śraddha しないことは釈尊に対する信の念がないことであるから、それは放逸に走ることになるであろう。妙法華経が憍恣の心を生じ放逸してと訳して viśraddha の訳を欠いたのは、この辺をふまえたからであろうと思われる。そしてこのことは、śraddha のないあり方は放逸に走るあり方につながることを暗示しているのではなからうか。

これらの śraddha の使用例に対して、adhimukti の使用例が一箇所に見られる。それは久遠の生命の釈尊は娑婆世界にあって常に法を説くが、衆生を度すために或る時は燃灯仏として現われるなどして、種々な方便をもって微妙の法を説くとなされた次の所で

如来。見_下諸衆生業_三小法_一徳薄垢重者_下 (11)

と示されている。これに対する正・梵両法華経は

所行不_レ同徳本浅薄。多_レ所_三壊破_一而不_二信樂_一。 (12)

tathagato nānādhimuktānān sattvān alpā kuśala mūlānān bahupakṣesānām evam vadati (13)

(如来は、善根少なく煩惱多く、種々な信解の衆生らのために、かく語る)

と述べているから、妙法華経が楽小法と訳したものは *nana adhimukti* であると思われる。このような *adhimukti* に関する楽小法の訳は、すでに指摘したように、藥草喩品や信解品などでも見られるところでもある。⁽¹⁴⁾そして正法華経は不信樂と訳出している。梵文法華経には不と訳される否定の文字は見えないが、善根少なく煩惱多いものには釈尊の微妙な法は当然 *adhimukti* 出来ないところのものであるから、不信樂と訳されたものであろう。妙法華経の訳語である楽小法における小法の文字も、このような意味合いにおいてなされたものであろう。

これらの外に如来寿量品の妙法華経訳には信の文字を見ることが出来るが、それらはともに *śradhā* と *adhimukti* に関する訳語ではない。たとえば右の *adhimukti* に関してふれた文の直前において、釈尊は方便によって微妙な法を説いたとしているが、その理由を述べたところでは、

觀三其信等諸根利鈍⁽¹⁵⁾

とあるが、梵文法華経はこのところを

tattāgata āgat'āgatānān sattvānān indriya parāparajātān viry'ārabdhī mātrātān vyavalokya ⁽¹⁶⁾

(如来は次々とやって来る衆生らの根の大小を知って、精進の強さを見きわめて)

と述べているだけで、それが信等に関するものであるかどうかを示してはいない。したがって正法華経も妙法華経の信等に該当する訳をなしてはいない。

更に、如来寿量品偈の中には、

衆生既信伏 質直意柔軟 一心欲見⁽¹⁷⁾見仏

とのべ、又

余国有三衆生 恭敬信樂者⁽¹⁸⁾

とのべて、釈尊に對しての信をもつ生き方が強調せられているが、これらの文に對する正法華經の訳文は、

歛喜踊躍 假使質直 說^三至誠言^一

及与異人 眷屬圍繞 因而宣揚⁽¹⁹⁾

であつて、一向に信の語があらわれて来ない。梵文法華經も

rju yada te mrdu mardāvās ca utsrjja kāmās ca bhavanāti sattvāh —⁽²⁰⁾

tato ahañ śrāvaka saṅgha kṛtva ātmāna darśemy ahu gṛdhrakūṭe ||

(彼の衆生らが正しく優しく柔軟で愛欲を捨てたとき、私は声聞の集團を引きつれて自らをグッドーラ・クータ山にあらわす)

anyehi sattvehi puras kṛto 'hañ tesāñ prakāśemi manāgra bodhim —⁽²¹⁾

(他の衆生らに尊敬されて私は、私の最高の覺りを説示する)

であつて、信に關する言葉は語り出されてはいない。彼の衆生らが正しく優しく柔軟で愛欲を捨てるといふ時、それは釈尊の教えに對して一心になることを意味するであらう。それは仏への信の姿なのかもしれない。そこで妙法華經の信伏という訳語がなされ、信樂の訳がなされたものであらうと思われる。

このように、如来寿命品では *śradhā* がもつばら説かれていることになるが、それは仏の教えに對してのひたすらな信を意味し、その信をもつことが肝要なことを指摘していると思われる。

〔註〕

(1) 日蓮聖人は開目抄に「此経に二ヶの大事あり」(539)とし、二乗作仏と久遠実成を挙げてゐるが、「發迹顯本せざればまことの一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにいたり」(552)とのべて、久遠実成こそ法華経の肝心であることをのべてゐる。

- (2) 大正九・42中
 (3) // 113上
 (4) K 315
 (5) 大正九・42中
 (6) // 113上
 (7) K 315
 (8) 大正九・43下
 (9) // 115中
 (10) K 326
 (11) 大正九・42下
 (12) // 113下
 (13) K 318
 (14) 室住一妙 古稀 P 103 115
 (15) 大正九・42下
 (16) K 317
 (17) 大正九・43中
 (18) // 114下
 (19) // 114下
 (20) K 324
 (21) // 324